国分寺市障害者基幹相談支援センター事業
令和元年度 国分寺市相談支援スキルアップ研修
［ネットワーク研修Ⅱ（障害福祉ー高齢福祉）］

「世帯を支える支援体制とは」
研修開催報告書

日 時	令和元年 10 月 07 日（月） 午後２時 00 分～4 時 45 分	場 所	cocobunji プラザリオンホール A
		主 催	**国分寺市障害者基幹相談支援センター**

１．背景

昨今、社会問題として取り沙汰されている「8050 問題」は、本人の引きこもりの長期化等により、その親も高齢化し、どちらも支援につながらないまま孤立してしまう事態を招いている。福祉業界においても、「高齢化し孤立する障害者と家族」への支援課題が、「8050 問題」として浮き彫りになっている現状がある。

例えば、国分寺市においても、高齢の親に介護保険サービスが入ったことにより、どこにもつながっていない障害者が明らかになるケースや、障害者と同居する高齢の親に支援が必要な状況が生じているにも関わらず、必要なサービスの導入が難しいケースが顕在化してきている。制度により支援体制が分断されることなく、世帯を捉えた包括的支援体制の構築が求められている。

２．目的

- 「世帯を支える支援」について、障害分野と介護保険分野がともに学ぶ機会を持つことで、制度を超えた支援ネットワークの構築を図る。
- 研修を通じて制度を超えた顔の見える関係をつくり、互いの実際の支援に活かせる関係性の土台をつくる。それぞれの立場や役割の違いを活かした支援体制の具体的イメージを共有する。
- 互いに感じている支援の困難性を共有し、世帯を支える視点で検討・連携・協力し合える支援体制の構築につなげる。

３．講師

浅野 徹 氏（社会福祉法人練馬区社会福祉事業団 高松地域包括支援センター センター長、認知症地域支援推進員、社会福祉士、介護支援専門員）

４．タイムスケジュール

14:00～14:05　開会挨拶（国分寺市障害者基幹相談支援センター センター長 銀川紀子）
14:05～14:30　講師講演「練馬区における取組状況」
14:30～15:45　グループワーク
「国分寺における障害者―高齢者世帯を支える支援体制」
16:00～16:40　グループ発表、まとめ

５．参加状況

参加者：55 名

〈参加者内訳〉

相談支援事業所	13 名	地域活動支援センター虹・地域活動支援センターつばさ 相談支援事業所のぞみ・こどもの発達センターつくしんぼ 相談支援事業所コトリナ・地域生活支援センタープラッツ
地域包括支援センター等	８名	国分寺地域包括支援センター こいがくぼ・ひよし・なみき・ほんだ・ひかり
社会福祉協議会等	６名	国分寺市社会福祉協議会・権利擁護センターこくぶんじ 自立生活サポートセンターこくぶんじ
行政	６名	国分寺市高齢福祉課・国分寺市障害福祉課 国分寺市健康推進課・国分寺市生活福祉課
参加者合計	33 名	他、講師１名、事務局５名、実習生２名

６．講演及びグループワーク

① 講演　　＊別紙資料、当日のパワーポイントを参照のこと。

当日の講師を務めた、浅野 徹氏（練馬区高松地域包括支援センター：センター長）より、本研修テーマに関連して、「世帯を支える練馬区の取組状況」と題し講演があった。

内容は、①練馬区の概要、②練馬区の地域包括支援センターの再編と強化、③地域の高齢者を面で支える取組、④練馬区における高齢分野と障害分野の連携について解説があった。

②グループワーク

練馬区での取組状況の講演を受けて、「国分寺における障害者―高齢者世帯を支える支援体制」をテーマとしたグループワークを行った。

１グループあたり、７～８名のメンバーで構成した。各グループのメンバーは、相談支援事業所、地域包括支援センター、社会福祉協議会、行政等の構成員とし、各分野のバランスを鑑みて配置した。グループワークの実施まとめは、次頁を参照のこと。

≪グループワークのまとめ≫

「国分寺における障害者-高齢者世帯を支える支援体制について」、各グループで話し合った。

〔意見交換した内容〕（抜粋）

	世帯の特徴、感じている課題など	⇒	対応策、取り組みの工夫など
Ⅰ	・本人や家族の問題意識が、希薄なケース。 ・連携先や相談先が、不明瞭なケース。 ・親子で、サービス等利用や調整が必要なケース。 ・家族（個人）が、地域から孤立したケース。 ・共依存またはパワーバランスが逆転したケース。	⇒	・根気強く、見守りを継続する。 ・発達段階のステージが変わる時などに、支援が途切れないようにする。 ・情報共有、関係機関連携、関係者会議の開催等。 ・キーマンを増やすことが地域づくりにつながる。
Ⅱ	・サービスにつながらない（6020/5020）世帯。 ・子に障害の疑いがあるケース。 ・ごみ屋敷問題。 ・本人や家族の権利擁護について。 ・経済的課題（年金、生活保護）を抱えるケース。	⇒	・ひきこもり世帯を孤立しないように意識する。 ・生活環境の把握をする。 ・世帯の閉鎖性を支援者間で共有する。
Ⅲ	・虐待(暴力)ケース。 ・子に障害が疑われるケース。 ・キーパーソン不在のケース。 ・児童(教育機関卒業後)の支援。 ・課題の認識が希薄なケース。 ・引きこもりのケース。 ・複合的に課題を抱えるケース。	⇒	・アウトリーチの必要性、相談窓口があること。 ・予防策として若年期からの支援必要である。 ・教育機関とのつながりが必要となる。 ・「地域」の力を活用する。 ・多様な世代が活動できる場の提供が求められる。
Ⅳ	・8050 世代、7040 世代の親世代の文化や時代背景がある。 ・本人や家族の理解が難しいケース。 ・意思決定能力の判断に迷うケース。 ・支援を必要としない、介入困難ケース。 （ひきこもり、共依存、閉鎖的など含む）	⇒	・親子で通えるデイサービス、親子で住めるグループホームの希望がある。 ・「検討の場」があるとよい。 ・変化が見られなくても関わり続ける。何もなくても支援者が顔合わせの場を持つ。 ・普段から世帯に出入りする地域の人が、支援のインフォーマルな社会資源につながる。
Ⅴ	・今の暮らしを維持したい、このままサービスを利用せず生活を続けたい意向のあるケース。 ・親なき後の支援体制。 ・成年後見制度につなげる難しさがあるケース。 ・関係機関のキーパーソン不在。	⇒	・支援のタイミングを見守る。 ・緊急時など状況が変化した時の支援対象ケースとして把握しておく。 ・途切れない、孤立しない支援体制の構築等。 ・顔が見える支援者同士の関係構築が求められる。

７．参加者からのアンケート結果（抜粋）

参加者：33 名　アンケート回収：27 名（回収率　81.8%）

Q１．本日の研修はいかがでしたか。

[講演の内容についての感想]

・練馬区における高齢分野と障害分野の連携について、「街かどカフェ」の話を聞いて、連携のシステムが練馬区民に根付き、地域とのつながりが既にできていることがわかった。
・見えてきた課題の中で一番多い相談が、「8050 問題」と聴き、どこの地域でも共通の課題であることを認識できた。

[グループワークを実施してみて]

・他職種との課題共有が有益であった。〔複数回答〕
・他職種間で、「8050 問題」は、共通の課題認識であるということがわかった。
・高齢福祉分野、障害福祉分野の双方の支援者で、各々の課題や特徴、視点を共有できた。

[研修全体について]

・多職種での顔がみえる関係づくり、そして連携、情報共有が大事である。〔複数回答〕
・行政担当者の参加もあり、「地域づくり」を皆で一緒にやっていこう、という雰囲気を感じられた。
・予防的、長期的に働きかけることが必要だと感じた。
・早期予防として、教育機関との連携の必要性を感じた。
・母子保健分野も、高齢や障害分野と同じような課題を感じていることがわかった。

Q２．今後、実際の業務で取り組めそうなことは見つかりましたか？具体的にお書きください。

・「連携」、「情報共有」、「顔の見える関係構築」の大切さを感じた。〔複数回答〕
・担当する本人以外の家族の状況にも、関心をもって関わりたい。
・世代にかかわらず、誰もが安心できる居場所作りを行っていきたい。
・年齢を重ねるなかで、支援担当者が変わっても、切れ目ない支援ができる関わりをしていきたい。
・予防的視点から、若年層のうちから、専門家がアプローチできる（かかわれる）とよい。

Q３．今後、基幹のネットワーク研修（障害―高齢福祉）への期待することをご自由にお書きください。

・事例検討会を実施したい。
・各関係機関とのつながりを深める機会となる研修を希望する。〔複数回答〕
・支援につながっていないケースへの取組、途切れない支援体制づくりを検討できる場。〔複数回答〕
・三世代（親を介護する人が子も介護している）の介護者ケースへの支援について。

Q４．その他、今後の研修で取り上げて欲しい内容や研修会への要望等ご自由にお書きください。

・障害ー高齢分野の連携について、基礎から学べる研修内容を希望する。
・双方分野においての専門家間の懇談会のようなものが開催されると良い。〔複数回答〕
・障害分野でも高齢分野でもなく、「はざまにある人」のケースへの支援について取り上げてほしい。

（アンケート集計、以上）

８．まとめ

国分寺市内の障害福祉分野と介護保険分野（高齢福祉分野）が集って開催する研修会は、平成 28 年度(2016 年度)から開始し、今年度で 4 回目を迎えた。この研修会の開催を毎年重ねるなかで、障害―高齢の双方分野の関係性が深まりつつあることを感じていたが、今回の研修会では、研修の開始前から互いの名刺交換が自然とはじまり、参加者同士の和やかな雰囲気が形成されるなか、研修をスタートさせることができた。今回の研修会を終えて、双方の分野を超えた国分寺の支援チームの形成につながっていることを実感できた。

研修の内容を振り返ると、研修が開始された当初は、双方分野の福祉サービスの制度や認識の違いがクローズアップされてきたが、今回は、双方分野の情報共有と協働の大切さを認識できる研修会へと移り変わってきている。また、毎回、実施されるグループワークでは、当初、支援者同士の顔の見える関係づくりから、今回は、参加機関の各支援者が、お互いの情報や課題を共通認識として共有するだけでなく、お互いに出来ることを少しずつ手を伸ばし協力し合って、予防的、長期的展開に関わる支援方法を検討する必要があることが話し合われるようになっている。

このように、国分寺市の障害分野、高齢分野、地域福祉分野、行政が横並びで話し合える土壌ができてきた今、これらの関係性を地域の実践によりつなげる研修会への工夫が、今後、求められるようになると考える。次年度も引き続き、本研修を実施し、これまであがってきた地域の課題や話し合った対応策等をもとに、各機関の立場や役割の違いを活かした「国分寺支援チームの実践」をより一層深めることを目指した研修企画を実施していく。